

バンカートスクール2007年前期募集案内

BankARTスクールは、横浜・馬車道に残る歴史的建築物を芸術文化の場に再活用したBankART1929のプログラムのひとつとして、2004年4月に開校しました。

BankARTスクールの守備範囲は美術・演劇・音楽・建築・写真・ダンスなどアート全般におよび、講師は各ジャンルの第一線で活躍する人たちばかり、子供向けのワークショップから専門性の高い大学院レベルの講座までさまざまですが、いずれも少人数制で、講師と受講者、あるいは受講者同士の親密な交流を重視する現代の寺子屋をめざします。

BankARTスクールは日曜以外のほぼ毎日、休みなし（開講しています。2005年度11月期までで計50講座を開きました。1講座は概1回2時間（前期は2時間30分）ずつ2か月間（計8回）続くので、延べ800時間がこれらの講座に費やされたこととなります。受講者は延べ663人、お申し込みした講師は計172人で、ゲストを含めれば更に200人を超えます。

はっきりいいましょう、これらの講座を受けたところで即戦力にはならないし、なにか資格が得られるわけでもありません。アートなどなんの役にも立たないものです。だけど／だからすばらしい！と思える人間が受講できれば、毎日120分は幸福の時間が約束されるでしょう。



BankARTschool

BankART スクールの概要

基本的に週1回、2ヶ月間で全8回。定員は基本的に20名。時間は19時30分から21時30分（土曜日は15時から17時）です。場所は基本的にBankART Studio NYKになります。

スクール受講生の特典

受講生には、学生証を発行します。また、BankARTショップでの買い物に5%割引、BankARTバブおよびカフェ1,000円チケットが10%割引となります。

アシスタントの募集

BankARTスクールでは、講座の記録やサポートをお願いするアシスタントを募集します。アシスタントは記録担当の講座を無料、その他の講座を半額で受講できます。意欲のある方のご参加をお待ちしております。

申し込み方法

受講したい講座名、お名前、ご住所、電話番号、メールアドレスをメール・FAX・電話のいずれかにてお知らせください。その際に受講料の振込先をお知らせいたします。一講座15,000円（税込み）、はじめての方は入学金3,000円（税込み）も一緒にお支払いいただきます。また、講座によっては別途材料費や資料代がかかる場合があります。受講料、入学金をお振り込みください。入金が確認でき次第、手続き完了となります。なお定員になり次第、申し込み受付を終了させていただきます。

お申し込み・お問い合わせ BankARTスクール事務局
school@bankart1929.com TEL 045-663-4677 FAX 045-663-4745
BankART Studio NYK 〒231-0002 横浜市中区海岸通3-9

BankART1929

月

19:30

21:30

梅若猶彦 身体性・魅力的な身体作り方(妙花風ではなくフルーツ牛乳風) 5/7・14・21・28・6/4・11・18・25

身体的な基本軸として歩法と立癖の練習を行った後、それらを踏まえて能「道成寺」の(乱拍子)の考察と実技に移行してゆきます。前回のスクールでは「現代アートと古典」と題してアバングアルド風ミックスジュースを皆さんで作ってもらいましたが、今回は更に踏み込んだ、というか前回欠落していたフルーツ牛乳 (fru:tu gyunyu) まで修めたいと思っています。



梅若猶彦：能楽師シテ方。1958年大阪府生まれ。多くの能楽で自ら演じる傍ら、創作能や現代舞踊とのコラボレーション等に積極的に取り組む。現在、静岡文化芸術大学准教授、ロンドン大学客員教授。主な著書に『能楽への招待』など。BankART1929企画展「食と現代美術」では「ショートケーキを食べるで〜トリスタンとイゾルデより」「一泊二食付」を披露。

写真下・提供：慶應義塾大学DMC梅若猶彦監督作品「Birthday Cake」より

火

19:30

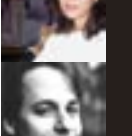
21:30

英語で行うアートの講座 帆足亜紀+白井美穂+Azby Brown 5/8・15・22・29・6/5・12・19・26

アートコーディネーター・美術家・建築家の視点からアートについての授業を英語で行います。海外経験豊富な講師陣によるリアリティのある話を伺えるとともに語学力も身につきます。英語が得意な方もそうでない方もOK! NYKがNYに変身!! ※辞書(英和・和英)持参



帆足亜紀：アークスプロジェクトディレクター。シティ大学(英国)にて博物館・美術館運営修士号取得。国際交流基金(1997~06年)やニッセイ基礎研究所(2000~02年)のアートプロジェクトに関わる。03年より現職。



白井美穂：美術家。1988年東京芸術大学大学院絵画科修了。ヒルサイドギャラリーや東京画廊等、国内外で作品を多数発表。93年ACCにより渡米。以後、主にNYを中心に制作活動を行う。07年「食と現代美術 part3」に参加。



Azby Brown：金沢工業大学メディア情報学准教授。1956年米国生まれ。80年イェール大学彫刻科卒業。日本建築・美学を研究。85年より東京大学建築学科に文部省給費留学生として来日。発表・批評・著作と精力的に活動。

水

19:30

21:30

加藤種男 実践アーツ・マネジメントのすべて 5/9・16・23・30・6/6・13・20・27

アートは人の心に直接訴える。人の心が変わらなければ、社会は変わらない。人と社会を変えるため、アートの力を信じ、アートの基盤整備を進めるには、どういうビジョンが必要か。そのビジョンの上に具体的に何を仕事とするべきか。芸術文化支援を中長期的社会的な投資として位置付けなおし、何が実践されるべきかを、語り尽くしたい。ビンゲンのヒルデガルトのビジョンと、鷲巣繁男の考察と、そしてまだ見ぬ友との対話を通して。



加藤種男：横浜市芸術文化振興財団専務理事。アサヒビール芸術文化財団専務局長を兼務。大山崎山荘美術館、アサヒ・アートフェスティバル等、1990年以来同社のメセナ活動を推進。メセナ協議会研究部会長として企業メセナをリード。また「創造都市」の旗振り役として、自治体へ文化政策を提言。NPO活動の推進にも取り組み、アートNPOリンク理事、日本NPO学会理事等を務める。著書に『新編アーツ・マネジメント』(共著)など。

木

19:30

21:30

横浜を撮る!撮る!撮る! 飯沢耕太郎 小原真史 北島敬三 倉石信乃 土屋誠一 5/10・17・24・31・6/7・14・21・28

2009年には開港150周年を迎える横浜。今回の写真ゼミでは、アーティストインスタジオと連動し、受講生がNYKを拠点に横浜の街に飛び出し、制作を行います。気鋭の批評家と写真家による熱い連続講評!6月には展覧会を開催。



飯沢耕太郎：写真評論家。1954年宮城県生まれ。84年筑波大芸術学博士課程修了。著書に『都市の視線』『ジャパニズム・フォトグラファーズ』等多数。



小原真史：1978年生まれ。第10回重森弘施写真評論賞。監督作品に『カメラになった男』写真家中平卓馬がある。古屋誠一展『Aus den Fugen』企画。

北島敬三：写真家。1954年長野県生まれ。81年日本写真協会新人賞、83年木村伊兵衛賞。主な写真集に『PORTRAITS+PLACES』等。

倉石信乃：明治大学理工学部准教授。1963年長野県生まれ。近現代美術・写真史研究。89~06年横浜美術館学芸員。著書に『反写真論』等。

土屋誠一：美術批評家。1975年生まれ。論稿に「平面・反復・差異—アンディ・ウォーホルの二連画について」「戦時体制下の写真批評—瀧口修造を読む」等。

写真左上：©Emi Anrakuji

金

19:30

21:30

国際展は変わる!? 村田真+小崎哲哉+新川貴詩 5/11・18・25・6/1・8・15・22・29

今年はヴェネツィア・ビエンナーレ、カッセルのドクメンタ、ミュンスタークラフトプロジェクトが重なる10年に一度の年。国際展といっても、19世紀の国家主義・博覧会の要素をいまだ残すヴェネツィアから、東西冷戦の緊張なかで発展したドクメンタ、作品を見て歩くオリエンテーリング方式のミュンスタークまで、目的も形式も異なる。この3大展の予習を兼ねて、国際展の過去を振り返り、未来を考える。最終日6月29日には新川貴詩+バルコニコシタによる公開報告会を予定。



村田真：美術ジャーナリスト。東京生まれ。朝日新聞、北海道新聞、webマガジン「artscape」等に執筆。慶応義塾大学・学習院女子大非常勤講師。



小崎哲哉：編集者。1955年東京生まれ。webマガジン「REALTOKYO」、アート雑誌「ART IT」発行人兼編集長。企画制作に写真集『百年の愚行』等。

新川貴詩：美術ジャーナリスト。1967年兵庫県生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了。現代アートに関する執筆活動の他、展覧会企画も務める。著書少々。

土

19:30

21:30

磯達雄+五十嵐太郎 現代建築を10倍楽しむ法 5/12・19・26・6/2・9・16・23・30

建築を見るのは面白い。その見方がわかるともっと面白い。この講座では、神奈川県や東京都などBankARTの近場にある現代建築を実際に見に行き、それを鑑賞します。見学先には完成したばかりの新作から1950~60年代に建てられたモダニズムの名作まで幅広く採り上げます。それを楽しむためのポイントを伝えると同時に、受講者とのディスカッションを通じて、建築を多角的にとらえる方法を身につけてもらいます。最終日はアートスタディーズと連動した公開講座を予定。



磯達雄：建築ジャーナリスト。1963年埼玉県生まれ。88~99年『日経アーキテクチュア』編集部。2000年に独立し、02年からフックススタジオ共同主宰。共著に『建築の書物/都市の書物』『昭和モダン建築巡礼』等。



五十嵐太郎：1967年パリ生まれ。東北大学准教授。主な著書に『終わりの建築/始まりの建築—ポスト・ラディカル主義の建築と言説』『新宗教と巨大建築』等がある。

*土曜日はツアーによって時間が異なります。

多木浩二 知の外部への航海—キャプテン・クック 7/9・16・23・30・8/6・13・20・27

冒険物語として読まれるクックの航海は周到な知的探求の旅であった。もっとも重要なことは西洋十八世紀の知をもって、その外部に出ようとしたことであつた。知の内部で様々なことが起こっていた。科学のみならず、芸術の変革がおこった。これをマイクロ・ポリティクスとすればマクロ・ポリティクスはなによりもこの航海あるいは西洋の世界進出の運命だった。つまり知の外部への旅たならざるをえなかったのである。クックの死はほとんど必然的におこったのだ。我々はクックとその部下の選した膨大な資料を元に、ミッシェル・フーコーの、例えば「言葉と物」を比較してみようではないか。西洋の知の内部で無事な構成をうみだしたフーコーと比べて、クックの粗野な航海の意義はなんだったのか。



多木浩二：評論家。神戸市出身。東京大学文学部卒。元千葉大学教授。芸術にたいする感受性と哲学的思考を結びつけ、芸術や文化を論じつつ、歴史哲学的認識や存在に至る道を模索する。著書多数。「眼の隠喩」「生きたれたる天皇の肖像」「シジフォスの笑い」「もの」の詩学』『進歩とカストロフィー』等。

みかんぐみ みかんぐみ式住宅のつくり方 7/10・17・24・31・8/7・14・21・28

建築の原点ともいわれる住宅。今回は対象を住宅に限定して、建築設計集団みかんぐみの、建築デザインの進め方を読み解きます。メンバーそれぞれの、そして時には担当スタッフの視点も織り込みつつ、みかんぐみでのデザインに対するさまざまな思考を確認、整理することを目指します。みかんぐみが設計した住宅に限らず、いろいろな住宅作品を対象とすることになるでしょう。今年は講義形式で展開します。



みかんぐみ：1995年設立の加茂紀和子、曾我部昌史、竹内昌義、マニエール・タルディッツの4人による建築家ユニット。戸建住宅から、保育園、小学校やライフハウスなどの建築設計を中心に、家具、プロダクト、展覧会でのインスタレーションなど幅広くデザインを手がける。BankART関係では「ハンガートンネル」「マナイタハウス」「銀行美術的硫黄蒸気温泉」「BankART妻有」を制作。

都市と自然とランドスケープ2 進士五十八ほか 7/11・18・25・8/1・8・15・22・29

政府や自治体の緑・都市・景観行政の第一人者進士五十八氏を中心に、東京農大チームが「都市と自然」について多角的にアプローチする。昨年度12~1月期に引き続き第二回目。①金子忠一：公園のマネージメント ②濱野周泰：大都市のなかの社叢(神社の森の植物たち) ③青木つづみ：大都市の自然空間(多摩川のオープンスペースを生かそう) ④阿部伸太：緑豊かな住宅地景観を保全する(東京の風致地区) ⑤一場博幸：大自然からのインスピレーション(尾瀬ヶ原の取容力) ⑥高塚 敏：市民と農民のコラボレーション(田園自然再生コンクールの実際) ⑦鈴江恵子：田園をエンジョイ(EU・ドイツのグリーンツーリズム) ⑧進士五十八：ポランディア時代の緑のまちづくり



進士五十八：東京農業大学教授。農学博士。1944年京都市生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。主な著書に『日本の庭園』『農』の時代』『都市になぜ農地が必要か』『ランドスケープ・アーキテクチャの風景』など多数。

*講師・内容は変更されることがあります

福住 廉 アートの綴り方2 7/12・19・26・8/2・9・16・23・30

昨年度の「アートの綴り方」の続編。狭い意味での「美術批評」ではなく、エッセイやレビュー、ルポルタージュなどアートについて幅広く書きたい人におすすめ。アートを見ることから始め、アートを書くことやアートについて論じ合うことの訓練を繰り返すことによって、たんなる鑑賞者でも批評家でもない、アマチュアのライターを目指す。最終的な成果を自主的なフリーペーパー『HAMART!』の誌上で発表する予定。



福住 廉：ライター。1975年東京生まれ。九州大学大学院比較社会文化学府博士課程単位取得退学。美術出版社主催第12回芸術評論で佳作受賞。『BT/美術手帖』『artscape』『エスカイプ』などに寄稿する一方、東京は新川のギャラリーマキで連続企画展「21世紀の限界芸術論」を手掛けている。

メタフォルカルシティ〜映像文化都市 7/6・13・20・27・8/3・10・17・24

「映像は比喻。象徴は限定した意味を付与しますが、比喻の連鎖は無限の空間を生成していきます。」これは映画監督クルコフスキーが語った言葉。「映像文化都市」をひとつの指標とする横浜において展開されるプログラム『EIZONE』は、横浜市中の建物を巡る映像イベント。これと連動してBankART全館で開催される映像関係の展覧会の出品作家を中心に、この講座を構成します。



岸本 康(アートドキュメンター/The Ufer!Gallery) / 松本春崇(出品作家) / 小林耕平(出品作家) / 中谷日出(NHK解説委員) / 田中功起(出品作家) / 岡部友彦(建築家/映像ディレクター) + 小泉雅生(建築家/家の鼻地区再整備設計) / 伊藤 存(出品作家)

オーブンレクチャー 7月6日 C. ボルタンスキー(出品作家)と建島 哲(国立国際美術館館長)との対談

作品写真:PopulouSCAPE. NIGHT FLIGHT OVER AN URBANIZING WORLD. 制作: Team PopulouSCAPE

木下直之 横浜清正公ストリート考〜都市・記憶・造形物

7月4日はじめに清正公ストリートにて728横浜のかたち〜絵図と地形 84横浜のかたち〜埋田山と伊勢山と野毛山(ツアー) 811墓地と墓碑 818記念碑と肖像彫刻 825ミュージアム 91横浜外国人墓地と観音堂(ツアー)(予定) 98おわりに横浜きっての盛り場に「清正公ストリート」がある。清正公は神格化された加藤清正のこと、幕末の開国から始まるはずの歴史の浅い横浜に、なぜそんな昔の武将に因んだ地名が残るのか。清正公ストリートを手掛かりに、横浜の地層をほんの少しだけ削ぎしてみよう。都市の記憶はどのように伝えられるのか、そのために開発され、都市の各所に置かれてきた墓碑、記念碑、肖像彫刻、ミュージアムなどに目を向けたい。8月4日と9月1日には、炎天下、横浜を歩く。



木下直之：東京大学大学院教授。文化資源学。1954年浜松市生まれ。兵庫県立近代美術館学芸員、東京大学総合研究博物館助教授を経て、2000年より現職。『美術という見世物』(93年)でサントリー学芸賞。著書に『ハリボテの町』『写真画論』世の途中から隠されていること』『わたしの城下町』等。美術を中心に、19世紀の物質文化全般を研究対象とする。